

「2022年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学法学部4年 藤田弘樹

ベトナムには、「thảo mai」という言葉がある。日本語に訳すと、「お世辞を言う、建前を使う」という意味だ。留学前、共同発表のテーマであった「日本とベトナムの国民性・お世辞への認識の違い」について下調べをしていた私は、この言葉が日本人の特徴を表す単語として使われていることを知った。日本人は、thảo maiである。日本人と関りを持つベトナム人は、そう思っているらしい。

この事前知識の結果、私は共同発表のアンケートでベトナムと日本の国民性に如実な違いが出ることを予想していた。ベトナム人からみて日本人が thảo mai であるなら、日本人から見たベトナム人はかなり率直にもの言う人たち（「サバサバ」とでも言えばよいのだろうか）なのだろう。そう考えていた。

たしかに、アンケートは大方予想通りの結果となった。日本人の方がお世辞を使う頻度も高く、言いたいことを我慢する傾向があったし、具体的な状況（例えば、知り合いのバッグに良くない印象を抱いた時、それを指摘するかどうか）についても、日本人の方が相手に遠慮する傾向が強かった。

だが、実際にベトナムの学生と交流してみると、「相手に遠慮することはある」という意見は多く貰ったし、私が予想していた「サバサバ系ベトナム人」といった学生はほぼおらず、日本でもよく見るような大人しめの学生が多かった。特に意外だったのは、「ベトナム人は、はっきりとした回答を嫌う傾向があり、どちらかというと思う・どちらかというと思わないのいずれかを選択しがち」という意見をベトナムの学生に貰ったことだった。なにしろ私は、「日本人こそはっきりした解答が苦手で言葉を濁しがち」という印象を持っていたから、日本人以上にベトナム人にその傾向があったことは衝撃だった。私が日本的な性質だと思っていたものを、ベトナム人は日本人よりもさらに強く持っていたのだ。

留学当初こそ、私は「日本とベトナムの違いを見つけたい」と意気込んでいたが、最終的には、「日本とベトナムには共通点が多い」という発見につながったと感じている。「互いに白黒つけることが苦手だ」ということに気付ければ、ビジネスであれ、外交であれ、距離が一気に縮まるのではないかと思う。今でこそ、「thảo mai」と呼ばれる日本人ではあるが、今後ますます交流が増える中で、（確かに「thảo mai」的な側面はあるが、）ベトナム人とかなり似ている人たちだと、ベトナム人から親しみを持ってもらいたい。自分もその一助になりたい。そう感じた留学だった。